

---

# 半分だけ

坂田火魯志

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

半分だけ

### 【Nコード】

N13850

### 【作者名】

坂田火魯志

### 【あらすじ】

八坂十郎は死んだが蘇ることになった。しかしそれは完全ではなく。北欧神話からもヒントを得た作品です。

## 第一章

半分だけ

八坂十郎は戦で死んでしまった。源氏と平家に分かれたその戦で彼は平家方の有力な武将だった。だが屋島においてあえなく死んでしまった。

そうして今は三途の川のところにいる。しかしだった。

その前にふと痩せた男が出て来た。そして十郎に対して言うのだった。

「待つのだ」

「待てというのはわしにか」

「左様、八坂十郎だな」

「こつ彼に言うのである。」

「そうだな」

「そうだとすればどうするのだ？」

「十郎もまた彼に返す。」

「それで」

「ではそなたに言っておこつ」

「男は彼を見据えながらまた言ってきた。」

「そなたはここにいてはならん」

「死んだというのか」

「いや、そなたは死ぬ運命ではなかった」

「そうだとするのである。」

「あの戦いではな」

「ではどうだというのだ？」

「十郎は男の言葉を受けて考える顔になりまた言葉を返した。」

「それなら」

「生き返るのだ。よいな」

「人が死ぬのは当然のこと。だが生き返れと言われるとは思ってい

なかった」

彼にとつては戦で死ねたから本望であった。それで生き返ると言われていささかそう思っていたのも事実であった。そのことを述べたのである。

「しかし。生き返るのならだ」

「だが。一つまずいことになった」

ここで男はこう言ってきた。

「そなたには済まんがな」

「済まんとはどういうことか」

「半分だけだ」

こう言ってきたのである。

「生き返ったのは半分だけなのだ」

「話がわからんが」

十郎はそれを聞いてすぐにいぶかしむ顔になった。

「どういうことだ、それは」

「そなたの身体の右半分は生き返った」

男はそれはだというのだ。

「しかし左半分はだ」

「違うというのか」

「そうだ。そこは生き返らなかった」

「では死んだまま」

「左様、そなたは身体の左に傷を受けたな」

このことを話すのだ。傷を受けたのはそこだったのだ。左胸を貫かれてそのうえで倒れ海に沈んだのである。そうなってしまったのだ。

「それでだ。そこは生き返らなかった」

「また面妖な話だな」

「生き返らせようとしたが間に合わなかった。そこだけは三途を越えた」

「ではわしはどうなるのだ？」

彼はいぶかしむ顔で返した。

「右だけが生きているとなると」

「右は生きている。だが左は死んで蘇る」

「左半分は屍のままか」

「そういうことだ。これでわかったか」

男はこう十郎に話した。

「そなたは右半分は生きているがだ。左半分は死んだままで生きるのだ」

「ではわしは戦えぬではないか」

十郎はそれを聞いてまずはこう言った。

「右だけでは」

「腐ることはないがそれでもだ」

「死んだままか」

「そうだ、死んだままでだ」

そうなっていくというのだ。

「それでもよいか」

「どうしようもないのだな」

「そしてそなたはまだ死ぬ時ではない」

同時にこのことも話してきた。生きなければならぬというのだ。

「そのまま生きるのだ」

「そうか。それならだ」

十郎の顔は慚然としたものであった。だがそれでも言ったのである。

「それでよからう」

「そのまま生きるのだな」

「これも運命だ。戦えぬのは武士として残念至極」

彼が言うのはこのことだった。それを言ったのである。

## 第二章

「だが、それで生きよう」

「そうして貰えるか」

「そうだ、それでだ」

男の声が強くなった。そうしてだ。

「そなたは今から戻るがいい」

この言葉と共にだった。十郎の視界が変わった。三途の川から消えてだ。あの屋島の海岸に出た。そこにいるのはもう誰もいなかった。

「源氏の者も去ったか」

彼はそれを見て言った。

「そうか、そして」

己の左手を見る。やはりそこは動かない。血の気もなく青い。まさに死人の身体だった。

その身体で外から出てそうして仏門に入った。十郎は比叡山に入りその名を海洸とした。その名になり山で修業に入ったのである。

他の僧達の間ではだ。彼は寡黙で真面目な人物として知られた。朝も昼も夜も読経を読み仏像の前にいた。そうした人物であった。いつも顔に頭巾を被ってだ。そうして一人修業に明け暮れていた。

「何か凄い人だよな」

「ああ、一人でひたすら修業されてな」

「確か前は武士だったんだらう？」

「このことも話された。」

「平家のな」

「そうだったんだらう？屋島の戦で生き残ってここに来たのか」

「成程な」

「しかしな」

ここで僧の一人が言った。

「何であんなに一人で必死に修業するんだ？」

「そうだよな。何かあつたのか？」

「戦が嫌になつたのかね」

「そうじゃないのか？ほら、武士の人ってそうじゃないか」

ここで武士について話された。

「戦の無常さを感じてそれで仏門に入る人が多いじゃないか」

「ああ、それな」

「多いよな、確かに」

「そうだよな」

しかもだった。

「ここにはこういう人も多いし」

「そうそう」

「それでかな、やっぱり」

「きつとそうだろ」

「それにあの頭巾」

そのいつも被っている頭巾のこと話した。

「あれはどうしてかな」

「刀傷か？」

「それじゃないのか？」

戦ではつきものである。僧達はそれではないかと考えた。

「それを隠してじゃないのか？」

「色々と事情のある人なんだな」

「みただいな」

彼についてこう話されていく。そしてそれを聞いてだ。比叡山中でも高僧として知られている示現がやって来てだ。そのうえで彼に問うたのだ。

「少し聞きたいことがあるのですが」

「何でしょうか」

場所は彼がいつもいるその堂に来てだ。堂の中は静かであり質素なものである。阿弥陀如来の仏像があり他には何も無い。そうした

場所である。そうして彼に問うてきたのである。

「貴方は武士でしたね」

「はい」

その問いに静かに頷く。

「その通りです」

「そうですね。それではでしょうか」

「それではとは？」

「戦に無常を感じてそれでここに来られたのでしょうか」

このことを問うのである。

「それでなのでしょうか」

「いえ、それは違います」

しかしであった。海洗はこう答えた。そしてであった。

「宜しいでしょうか」

「宜しいとは？」

「別に隠していたわけではありません」

示現に対してまずはこう告げた。

「身体のことですか」

「顔ではなくですか」

「そう、身体です」

落ち着いた言葉だった。それは恥じているものではなかった。



### 第三章

「拙僧の身体のことです」

「それですか」

「それを見せて宜しいでしょうか」

「こう言うのである。」

「それで」

「はい、それでは」

それに頷いてであった。示現は言葉を返した。

「それで御願いします」

「わかりました」

それを受けてである。彼は頭巾を取った。するとそこから出て来たのは。

「何と」

「驚かれましたか」

「はい」

示現は生真面目な顔で頷いて答えた。

「申し訳ありませんが」

「いや、それは当然のこと」

だが彼はこう返したただけであった。見れば剃った頭のその身体の左半分は青い。右半分は明るい生者なのに対してだ。左半分は死者のものだったのである。

「この身体のこととは」

「そう言われるのですか」

「そうです。ですから」

また言う彼だった。

「それはいいです」

「左様ですか。ですが」

ここで示現はさらに問うた。彼のその身体の左半分を見てだ。

「その身体で宜しいのですか」

「どうしてそうなったのかは聞かれないのですか」

「それも確かに気になります」

示現もそれは認めた。

「ですがそれ以上にです」

「それ以上にですか」

「その御身体について。何も思わないのですか？半分死んでいると  
いうのに」

「思わないではありません」

海洸は静かに答えた。

「それにつきましては」

「では何故そのまま」

「私はですね」

海洸はここで己のことを話した。その武家としての生い立ち、そして生き返った時のことをだ。示現に対して包み隠さず話したのである。

そのうえでだ。こつも言った。

「全ては運命です」

「運命ですか」

「はい、ですから」

その言葉を続けていく。

「それを受け入れるしかないのではないのでしょうか」

「だからこそその御身体でいいというのですね」

「はい」

示現の問いに対してこくりと頷く。

「その通りです」

「ではそのまま生きられるのですか」

「この生を終えるまでは」

まさにその通りだという。

「そうするつもりです」

「左様ですか」

「それが私の考えです」

穏やかな言葉である。そしてそれには淀みがない。

「それはいけないでしょうか」

「いえ」

その彼の言葉にだ。示現は静かにその言葉を返した。

そうしてだ。言った言葉は。

「それでいいと思います」

「そう言って下さいますか」

「それが貴方の運命ならば」

まずはそこからだった。

「そしてそれを受け入れておられるならです」

「宜しいですね」

「私はそう思います。それで」

「ではこのまま」

「行かれるといいと思います。私の言うことではありません」

示現の言葉はこれであった。そうして彼の前から去った。彼の身体のことには誰にも言わなかった。そして海洗は静かに世を去ったのである。

だが彼の話は今も残っている。示現は何も言わなかったがそれでも事實は知れ渡るものだからであろう。そのことを伝えた者はいないが彼の話は語り継がれている。己のその運命を受け入れて生きた男についてはだ。今も尚話として残っているのである。

半分だけ 完

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1385o/>

---

半分だけ

2010年10月8日12時12分発行